

自然談話に現われる「と」「ば」「たら」「なら」

—非条件接続用法を中心に—

中 島 悦 子

1 はじめに

現代日本語の条件表現を担う接続形式には「と」「ば」「たら」「なら」（以上一括して条件接続形式という）などがあり、それぞれについての歴史的・共時的研究は意味・文法の両面からすでに多くある。例えば松下（1928）阪倉（1958）等の古代から現在に至る大きな射程を持つ歴史的研究をはじめ、国研（1964）渡辺（1974）益岡・田窪（1989）前田（1991b）等の共時的研究などさまざまな角度からの観察がなされてきている。しかし、これらの先学の研究は構文レベルにおいての特に書きことばの条件接続形式を対象として取り上げたものが多く、談話レベルにおいての話しことばの条件接続形式を対象として取り上げたものは少ない。

本稿は、いうまでもなくこれらの先行研究を受けるものだが、自然談話「職場における女性の話しことば」（1994）を対象資料とし、その中に現われる条件接続形式「と」「ば」「たら」「なら」の出現実態・様相を探ることを目的とするものである。特に自然談話に現われるこれら4つの条件接続形式の意味・用法を分析し、それらの用法と「と」「ば」「たら」「なら」の現われる言語環境、特にフォーマルかインフォーマルかという場面との関連性から4形式の改まり度についても検証する。

まず談話資料中の発話数11,421件中から「と」「ば」「たら」「なら」の条件接続形式は657件抽出されたが、そのうち「と」が176件、「ば」が260件、「たら」が195件、「なら」が26件ある。この出現数から見ると、話しことばでは「ば」が最も多用され、「なら」が少なく、「たら」や「と」はその中間ということになる。「たら」が話しことば的、「ば」が書きことば的、「と」

が中立的という従来の指摘（例えば寺村1981）は単純に言えば、ここではあてはまらない結果となっている。しかしながら、問題はそう簡単ではない。談話の中に出現する「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法を一つ一つ仔細に観察すると条件接続としての用法だけでなく、提題や文末詞等の用法（非条件接続とよぶ）にも広がっていくことが観察されるからである。しかも、談話中に出現する条件接続形式は、本来の条件接続としての用法よりも、非条件接続としての用法の方が出現数が多いという結果となっている。

そこで、表1において「と」「ば」「たら」「なら」の用法を分類し、表2において4形式の用法別の出現数をまとめて示し、表3において4形式の用法別の出現数をフォーマル・インフォーマル場面別に整理したものを示す。以下表1、表2、表3に従って論を進めるが、本稿では紙面の都合により、談話資料において出現数の多い非条件接続用法としての「と」「ば」「たら」「なら」を中心に検討していくことにする。

なお、表3におけるフォーマル場面とは会議・打合せ・相談等の改まり度の高い場面を指し、インフォーマル場面とは休憩時や昼食時の雑談等の改まり度の低い場面を指す。また、用例末の〔 〕内、例えば用例Iの〔18B・40m・相〕においては、18Bが調査協力者番号、40mが40代男性、相が相談場面であることを示す。

2 「と」「ば」「たら」「なら」の用法と出現実態

2.1 「と」「ば」「たら」「なら」の用法

「と」「ば」「たら」「なら」の用法は大きく条件接続と非条件接続とに分類できる。条件接続の分類は中島（1987、1990）を基に新たに修正を加えたものであり、非条件接続の分類は国研（1964）、高橋（1983）、前田（1991b）を踏まえ、中島が新しく修正し分類し直したものである。

「と」「ば」「たら」「なら」は形態的には異なるところがあるが、構文論的にはいずれも前件の補文の後につき、後件の主文がその後に続くものとして一括して扱うことができる。いずれも前件の後件に対する意味関係を表す接続形式であり、前件が条件として持ち出される時、仮定条件、一般条件、

既定条件とに分類できる。さらに後件に対して順接するか逆接するかによっても分類される(中島1990)。以上述べた条件接続の分類は前件と後件との意味関係という観点から分類したものだが、本稿ではさらに前件と後件との時間的關係という観点(中島1988)を加え、前件、後件がともに既に実現した事実を表す既定条件を事実的条件と修正し直す。

ところで、「と」「ば」「たら」「なら」はこのように前件が条件として後件に関係づけられるものだけではない。前件と後件との意味関係において条件接続を表さないもの(非条件接続とよぶ)もある。非条件接続とは、例えば前件の補文について「と」「ば」「たら」「なら」で文を終止するいわゆる文末詞的な用法をもつもの、談話の話題を提示するいわゆる提題としての用法を示すもの、「と」「ば」「たら」「なら」の直後に「いい」等の評価を表す語がついたもの、さらには否定形「なければ」の直後に「いけない」「ならない」等がついて助動詞的となっているもの、条件というより接続詞に近いもの等、本来的な条件接続とはいえないものである。しかも自然談話の中ではこの非条件接続の方が「と」「ば」「たら」「なら」が共通して持つ意味用法として優勢となっているのである。

ここで扱う「と」「ば」「たら」「なら」の意味用法を分類し整理して示すと、次の表1のようになる。

表1 「と」「ば」「たら」「なら」の用法分類

1. 条件接続	2. 非条件接続
(1) 仮定的	(1) 文末詞的
(2) 一般的	(2) 提題的
(3) 事実的	(3) 評価的
	(4) 助動詞的
	(5) 接続詞的
	(6) 並列的

以下に表1に分類した用法について、例を挙げて簡単に説明する。
条件接続のうち(1)の仮定条件接続とは未実現の事態を仮定し後件の条件とするものをいう。

- 1 それでもし、0 って出ればあ(うん inf (女))、これは別にもん、この2つの#問題ないんですけれどもお。(あー、あー、あー、あー inf (女))

[18B・40m・相]

2 1を選ん、選んで→もし2というふうに出たら、これは消しとかない
とお(うん inf(女))、まずいんじゃないかなあ。 [18A・40 f・相]

3 だから、クールに反応しちゃうと、★そっちが負けるかもしれない。
[17K・30 f・雑]

4 仕事があるんならやろうかなと思って。 [02C・20 f・雑]

例1、2はインフォーマルな同一場面に現れた[18B]と[18A]の会話例であるが、「ば」「たら」とも「もし」という仮定を表す陳述副詞を伴い、未来の仮定の事態を後件の実現の条件としている。例3の「と」、例4の「なら」も前件の仮定の事態を後件の条件としているものである。

(2)の一般条件接続とは渡辺(1974)の指摘にもあるように、前件が起これば必ず後件が起こるという前件と後件との関係が必然的なものをいう。

5 と、マスターに、印刷されて、試し刷りが一出ますから、(はい 他者(男))で、その試し刷りを見て、いいなと思ったらこのスタートを押せばこの40枚が印刷されます。 [07A・40 f・相談]

6 でないと、権利になると、最後は争いがありうる★わけですよ。
[04M・40 f・打]

例5においては前件の「このスタートを押す」という事態が起これば必ず後件の「この40枚が印刷される」という事態となるのであり、例6においても前件「権利になる」という事態のもとでは常に後件の「最後は争いがありうる」という事態を引き起こすのである。例5の「ば」、例6の「と」いずれも前件のできごとが生ずれば必然的に後件のできごとが生ずるという一般条件を表すものである。

(3)の事実的条件接続とは山田(1908)以来しばしば指摘されてきたものだが、単に前件の事実と後件の事実を「と」や「たら」で結びつけたものをいう。

7 ノウスの方行ったら、ふ、唇青くなっちゃったもん。
[02A・20 f・雑]

8 でも、福岡の日本語学校行くとねえ、もう一、そんなうら、裏とかゆうだけでなく、おもてだけでも女の人強かったですよ。

[17A・30 f・雑]

例7は前件の「ノウスの方へ行った」という事実と後件の「唇が青くなった」という事実とを「たら」で結びつけているだけにすぎない。例8も前件「福岡の日本語学校へ行った」という事実と後件「女の人が強かった」という事実とを「と」で結びつけている文である。この「たら」や「と」は未実現のことがらではなく、実際に起こった特定のことがらを結びつけるのに使われているものである。このように実際に起こったできごとを接続する「たら」や「と」を事実的条件接続ということにする。

2の非条件接続のうち(1)の文末詞的とは「と」「ば」「たら」「なら」などのついた前件で文を止めたもの、後件を省略したもの、後件を先に述べ、前件を後に述べる倒置文などをいう。

- 9 それまでにハワイー。〈笑い・複〉 [17K・30 f・雑]
 無理よー。〈笑い・複〉 [17K・30 f・雑]
 それ★まで、だって、ハワイー。〈言いさし〉 [17K・30 f・雑]
 →韓国行けば、←じゃ韓国。 [17B・30 f・雑]
 あ、だめだめ。 [17K・30 f・雑]
- 10 ラジオつけたら↑ [05A・40 f・雑]
 いいよ、★小さくだったら。 [05A・40 f・雑]
- 11 略そうゆうの、表情なんか、全部すっぽりはいるわけ、横ながだと、
 (そうそう 他者(男))ね、だけど、縦だと切れてんの、(んー 他者
 (男))うしろの男の人の顔とが。 [05A・40 f・雑]
- 12 辞書のひきかたも下手になるんですね、勉強してないと、あった。
 [09A・30 f・雑]
- 13 これじゃー、1クラスじゃ。 [08 I・30m・打]
 うーん。 [08A・50 f・打]
 いや、これが二人ならね。 [08 I・30m・打]

例9や例10のように「ば」や「たら」で文を終止した発話は提案や勧告に用いられるが、例10のように上昇イントネーション(↑)がつくこともある。例11や例12は倒置文といわれるもの、例13は後略のものである。

(2)の提題的とは高橋(1983)のいう条件形から発達した後置詞化したもの

に当たるが、ここでは次のように発話中の話題を示す形式いわゆる提題を示すものを主にいう。

14 あの一、6月の下旬にやってばかりなんで一、まあ、それ以降の情
報ってゆうと、この。指定校の、状況、ぐらいいかなってゆう感じですね。

[09A・30f・会]

15 2人★3人(ふたりさんにん)まとめてとかいえばさ一、(そうそう
そうそう inf(女)) けっこう★あれじゃない↑

[16E・30f・雑]

16 あのホームレスってほら、普通の人たら、おかしいけど、アメリカ
なんかみるとね。

[17A・30f・雑]

17 →# # # ←日本なら、全部食べたら1万円とかっていう世界じゃない
ですか。〈笑い・複〉〈間4秒〉

[18C・20f・雑]

例14「ってゆうと」、例15「といえば」、例16「たら」、例17「名詞+
なら」はいずれも発話の話題を示すいわゆる提題的な用法で使われている
のである。提題的に使われる条件接続形式はその他に「についていば」
「といたら」「によれば」「によると」「とすると」「からすると」「にす
れば」「て見れば」「から見れば」等がある。

(3)評価的とは国研(1964)の陳述的条件に当たるもので、「と」「ば」「た
ら」「なら」の後に「いい」「いけない」「だめだ」「ありがたい」など評価
を表す語がつくものをいう。

18 劇場を変えたり、日程を変えたりするとだめなんだ。

[01D・40m・雑]

19 楷書で書いてくれるといいんですけど。

[14H・20f・打]

20 だから、ね一、なんか、ほら〈間〉趣味がある人とかだたら、ま、
そういうもん買ってくればいいけどお一。

[02A・20f・雑]

21 なんか、そうゆう動きをとれ、たらいいんじゃないかな一、とゆうふ
うに思っています。

[17A・30f・会]

22 あ、大都市とかならいいかもしれないけど。

[17A・30f・雑]

例19、20、21、22は「と」「ば」「たら」「なら」の直後にプラス評価の
「いい」がついたもの、例18は「と」の直後にマイナス評価の「だめだ」が

きたものである。

(4)助動詞的とは否定の条件形の直後にマイナス評価を表す「いけない」「ならない」がついて全体で1語のようになったものである。例えば次の例23の「なきゃいけない(なければいけない)」、例24「なきゃなんない(なければなんない)」等のように助動詞的に用いられるので、評価的とは分けて考える。

23 あたしーのほうがね、あげなきゃいけないのに。 [11A・20f・雑]

24 手術しなきゃなんないしね。 [08I・30m・雑]

(5)接続詞的とは「たとえば」「と」「すると」のように接続詞としての意味が強いものから、「そうすれば」「そうすると」「それだったら」「それなら」のように指示詞について接続詞的に用いるものまでを含めていう。

25 そうすると、そこでちょっと直しが入れれば、またかかりますが、色だけであれば中3日(みっか)ぐらい。 [03E・40m・会]

26 そうすればほら、もう1回きり最初出ちゃえば終わりでしょー。 [08A・50f・雑]

27 それでなんか、家族もいいかな、みたいになっちゃってー、そしたらなんかその人の友達まで、(あー他者(女))おれも行くーみたいなかんじで。 [02A・20f・雑]

28 だったらこれ、もっ、参加の活動数別、うちこめる趣味じゃなくて、これだったら、これんなるよ。 [04A・50f・指導]

例25「そうすると」、例26「そうすれば」、例27「そしたら」はソ系の指示詞についた形で、例28は「だったら」の形で、発話の文頭や中間に位置し、前の発話を受け後の発話につなげるといふ接続詞的な働きをしている。接続詞的な条件接続形式にはその他「さもなければ」「でない」と「そうしないと」「したら」「こうなれば」「これだったら」「それだったら」等が見られる。

(6)並列的とは次のように、特に「ば」の用法としてことがらを並べ立てる時に使われるものをいう。

29 でっ、〈笑い〉なんか、わたしもいい加減ですから、はい、はいなんてね、引受ちゃって、で、よくよく中身を見ましたら、ね、(はい 他者(女))育児も入れてほしいってゆうところもあれば、(あーあー 他

者（女）企業の社会的責任とかゆうところにウエイトをおいてほしいとか、（はー 他者（女））いろいろちょこっと違うんですね。

[04A・50f・打]

2.2 「と」「ば」「たら」「なら」の用法別出現実態

－非条件接続用法を中心に－

表2は「と」「ば」「たら」「なら」の用法別の出現数を示したもののだが、それによると、4形式の総数657件中非条件接続用法が366件（対総数比55.7%）、条件接続用法が291件（対総数比44.3%）となっており、「と」「ば」「たら」「なら」は自然談話では非条件接続用法として使われる方が多いことが分かる。非条件接続は文末

表2 「と」「ば」「たら」「なら」の用法別出現数

	と 数	ば 数	たら 数	なら 数	計 数
1 非条件接続	81	202	71	12	366
(1) 文末詞的	32	45	32	7	116
(2) 提題的	11	2	9	1	23
(3) 評価的	27	71	5	4	107
(4) 助動詞的	0	27	0	0	27
(5) 接続詞的	11	54	25	0	90
(6) 並列的	0	3	0	0	3
2 条件接続	95	58	124	14	291
(1) 仮定的	33	50	114	14	211
(2) 一般的	61	8	0	0	69
(3) 事実的	1	0	10	0	11
計	176	260	195	26	657

詞的用法や評価的用法としての使用が多く、並列的や提題的用法の使用は少ない。条件接続用法においてはその大部分が仮定条件として使われている。そこで、本稿では使用頻度の高い非条件接続用法に焦点を絞って「と」「ば」「たら」「なら」それぞれの用法別出現実態を検証する。

2.2.1 「と」の非条件接続における用法別出現実態

30 →でもだいたい→病院でねー、さんじゅー5万ぐらいかかるんだよね。

[16A・30f・雑]

- ★うん、うん、うん。 [16B・30f・雑]
 →うむ、病院で産むと。← [16A・30f・雑]
 病院で産まない、★だめですか↑ [16B・30f・雑]
- 31 ミステリーは、ほんと読みだすと一、で、その作家のみんな読みたくなっちゃんだよ、★〈笑い・複〉気に入るとね。 [06A・40f・雑]
 →あ←そうそうそう←そうそう。 [06I・20f・雑]
 それはあるね。 [06N・40m・雑]
 そう、ほんとに。 [06I・20f・雑]
 だいたいでもそうゆうの★読みだすと。〈言いさし〉
 [06M・20f・雑]
- 32 そうゆう生活ってやっぱしねー、身もち★くずす。〈言いさし〉
 [17A・30f・雑]
 →そこまでやらないと←だめなんだ。 [17K・30f・雑]
- 33 10人でいい。 [10A・40f・雑]
 だから、10人ってゆうと、あと2人がいないんだよ、どうやっても。
 [10B・40m・雑]
- 34 うちこめる趣味活動別、★活動の数、で、いくね。
 [04A・50f・指導]
 →参加活動の← [04L・50f・指導]
そうすると、参加活動の別でいくと、うちこめる趣味で、たとえば、これ別でいくと、ね、あー地域新興活動の人は三つ以上が多いと、読めるわけ。
 [04A・50f・指導]
- 「と」は総数176件中条件接続用法が95件、非条件接続用法が81件と、非条件接続用法の使用のほうが少ない。しかし、4形式の中では「と」の非条件接続の使用数は「ば」に次いで第2位を占める。「と」は非条件接続用法の中では文末詞的として使用される頻度が最も高く、評価的用法が次に続く。提題的と接続詞的用法はその中間に位置し、助動詞的、並列的用法としては全く使われていない。文末詞的用法の「と」は例30が示すように後件の帰結を先の発話で述べ、前件の条件節をその後の発話につけ加えるような言い方、

あるいは例31のように後件を言いさして省略してしまう言い方で使われている。

評価的用法の「と」は例32の「しないとだめなんだ」のように「と」の後件に評価を表す語がつく言い方で使われているが、全体で1語をなす表現というよりも前件と後件とが条件とその帰結といった関係を表す意味合いが含意される。

提題的用法の「と」は例33のように前の発話の「10人」を受け、「10人ってゆうと」と当該の発話の話題として取り上げている。談話資料中に出現する「と」はこのような「ってゆうと」の形で談話の提題を示すものとして使われるものが多い。

接続詞的用法の「と」は34の「そうすると」のように前の発話から予想される結果を次の発話で述べる順接型の接続詞的な言い方である。「でない」と「と」のような形式でも使われているがほとんどが「そうすると」の形式で使われている。

2. 2. 2 「ば」の非条件接続による用法別出現実態

- 35 うすーくやればいい★わけでしょ↑ [08 I・30m・雑]
- 36 あれ松田優作がやればよかったのに。 [06 A・40 f・雑]
- 37 だから、ゆわなきゃよかったなあと、あとでね。 [15 E・30 f・打]
- 38 も、かえなきゃいけないの。 [09 A・30 f・雑]
- 39 だからなにかひとつたとえ、咳払い さっきー、あの一、いま開
発しつつあるその、発声と、略 それを見につけさせるか(ええ、inf
(女))、さもなければ、あの一、それじゃなくて、えーなんか違うもの
を★身につけさせる、… [15 B・50 f・会]
- 40 そうだね、お金またととけば。 [02 A・20 f・雑]
たまたま★### [02 C・20 f・雑]
→いつでも←旅立てる状態しておけば。 [02 A・20 f・雑]

「ば」の非条件接続用法の出現数は202件、条件接続用法の出現数は58件となっており、圧倒的に非条件接続用法のほうが多い。また4形式の中でも「ば」の非条件接続用法の出現数が最も多い。「ば」は4形式の総数657件中

260件とあるように4形式の中では最も多用されている形式であるが、談話資料中ではその大部分が非条件接続用法として使われ、条件接続用法としての使用が非常に少ないことが分かる。非条件接続用法の中では評価的用法が71件と最も多く、次いで接続詞的用法54件、文末詞的用法45件となっているが、提題的用法は2件と少ない。また並列的用法、助動詞的用法は「ば」だけに見られる。

評価的用法の「ば」は例35「ばいい」のように「いい」というプラス評価語が「ば」の直後につく形式で使われることが多く、「ばだめだ」のようなマイナス評価語がつく形式ではほとんど使われていない。また、評価的用法の中には「ばよかった」の形式で残念だ(例36)、後悔(例37)というような話者の期待に反する気持ちを表すものもある。

助動詞的用法の「ば」は例38の「なきゃいけない」のように「ば」の後に評価語「いけない」がつく形式ではあるが、「なきゃならない」と同様助動詞として一語化しているものである。この助動詞的用法は談話資料では「ば」だけに見られ、使用数も27件と少なくない。

接続詞的用法の「ば」は例39の「たとえば」のように前の発話の内容をより具体的なものへと言い換えて説明するいわゆる同列型の接続詞として使われているもの、「さもなければ」のように前の文に述べたことがらと反する内容を後の文で述べるときにつなぐ接続詞的な用法等がある。談話資料の中では「たとえば」が54件中47件と最も多用されている。

文末詞的用法の「ば」は例40のように「ば」で文を終止する形式であるが、勧告の意味で使われているものが多い。また提題的用法は2件、並列的用法は3件と使用例は少ない。

2. 2. 3 「たら」の非条件接続による用法別出現実態

41 →じゃ、香港←ぐらい行ったら。 [17A・30f・雑]

42 じゃ、つくってあげようか↑、あたしが、なんかいったらさ、あ、ほんとに↑略 [15A・30f・雑]

43 逃げたってゆうか、遊びに行っちゃって、畑ん中をかけずり回ってて、

(ははん inf (女))そしたら、近所の、人が見つけてくれてねー、略

[10C・30m・雑]

44 あのー、[名字] 先生のご本なんですけど、(はい inf (女)) これを通してくださいとかってゆわれたんですがー、どうしたらいいと思います。

[07E・30f・相談]

45 略 ねえねえねえ、[名前] ちゃんにこれなん年生の作品だーつつたら、二年生とかゆっちゃって。〈笑い・複〉 [08C・40f・雑]

「たら」は非条件接続用法の出現数71件、条件接続用法の出現数124件とあるように条件接続用法として使われるほうが多い。また、4形式の中でも「たら」の条件接続用法の出現数はきわだって多い。「たら」が話しことば的といわれるのは条件接続用法としての「たら」に対してであることが理解される。非条件接続用法の「たら」は文末詞的と接続詞的用法として使われることが多く、評価的や提題的用法は少ない。

文末詞的用法の「たら」は例41のように勧めを表したり、例42のように助詞「さ」や「ね」を伴い倒置あるいは後略された文に現われる。

接続詞的用法の「たら」は例43のように前文と後文を「そしたら」の形で順接的に接続するものが圧倒的に多い。接続詞的用法としての「たら」はその多くが「そしたら」「それだったら」のように、ソ系の指示詞に後接した形で使われている。

評価的用法の「たら」は例44の「たらいい」のようにプラス評価の語がついた形で使われている。また提題的用法の「たら」は例45のような「つつたら」あるいは「つたら」の形でその発話の話題を提示している。

2.2.4 「なら」の非条件接続による用法別出現実態

46 そんな人いたんならねえ。 [02C・20f・雑]

そう。 [02A・20f・雑]

ぜーったい良かったと思うんだよね。 [02A・20f・雑]

47 あ、けどそんなガンガンに暑いんならいーな。 [02C・20f・雑]

48 →## # ←日本なら、全部食べたら一万円とかっていう世界じゃない

ですか。〈笑い・複〉〈間4秒〉

[18C・20m・雑]

「なら」は4形式の中では非条件接続、条件接続とも出現数が少なく、条件接続では仮定条件に、非条件接続では文末詞的、評価的、提題的用法に少数出現している程度である。

非条件接続のうち文末詞的用法の「なら」は例46の「ならねえ。」と助詞「ね」をつけて文を終止している。この発話における「なら」は実際には次の他者の発話に続くものであるが、しかし当該発話の文末詞として使われている。

評価的用法の「なら」は4件すべて例47の「ならいい」のようにプラス評価の語がつく形である。また、提題的用法の「なら」は例48のような「名詞＋なら」の形で使われているが、1件しかない。

3 場面別による「と」「ば」「たら」「なら」

表3 「と」「ば」「たら」「なら」の場面別の出現数と出現率

	場 面	と		ば		たら		なら		計	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1 非条件接続	フォーマル	51	7.7	120	18.3	25	3.8	5	0.7	201	30.6
	インフォーマル	30	4.5	82	12.5	46	7.0	7	1.1	165	25.1
(1) 文末詞的	フォーマル	16	2.4	24	3.7	9	1.4	5	0.8	54	8.2
	インフォーマル	16	2.4	21	3.2	23	3.5	2	0.3	62	9.4
(2) 提題的	フォーマル	6	0.9	1	0.2	2	0.3	0	0	9	1.4
	インフォーマル	5	0.8	1	0.2	7	1.1	1	0.2	14	2.1
(3) 評価的	フォーマル	18	2.7	39	5.9	4	0.6	0	0	61	9.3
	インフォーマル	9	1.4	32	4.9	1	0.2	4	0.6	46	7.0
(4) 助動詞的	フォーマル	0	0	15	2.3	0	0	0	0	15	2.3
	インフォーマル	0	0	12	1.8	0	0	0	0	12	1.8
(5) 接続詞的	フォーマル	11	1.7	40	6.1	10	1.5	0	0	61	9.3
	インフォーマル	0	0	14	2.1	15	2.3	0	0	29	4.4
(6) 並列的	フォーマル	0	0	1	0.2	0	0	0	0	1	0.2
	インフォーマル	0	0	2	0.3	0	0	0	0	2	0.3
2 条件接続	フォーマル	37	5.6	37	5.6	46	7.0	7	1.1	127	19.3
	インフォーマル	58	8.8	21	3.2	78	11.9	7	1.1	164	25.0
(1) 仮定的	フォーマル	9	1.4	33	5.0	42	6.4	7	1.1	91	13.9
	インフォーマル	24	3.7	17	2.6	72	10.9	7	1.1	120	18.3
(2) 一般的	フォーマル	28	4.3	4	0.6	0	0	0	0	32	4.9
	インフォーマル	33	5.0	4	0.6	0	0	0	0	37	5.6
(3) 事実的	フォーマル	0	0	0	0	4	0.6	0	0	4	0.6
	インフォーマル	1	0.2	0	0	6	0.9	0	0	7	1.1
計	フォーマル	88	13.4	157	23.9	71	10.8	12	1.8	328	50.0
	インフォーマル	88	13.4	103	15.7	124	18.9	14	2.1	329	50.0
合 計		176	26.8	260	39.6	195	29.7	26	3.9	657	100.0

場面別による「と」「ば」「たら」「なら」の出現数を表3により検証する。「と」は総数176件のうちフォーマル場面とインフォーマル場面の出現数はちょうど半々となっていることから、「と」の改まり度は中立的であるといえる。「ば」は総数260件のうちフォーマル場面の出現数のほうが多いことから、改まり度が高いと見る。「たら」は総数195件のうちインフォーマル場面の出現数のほうが多いことから、改まり度は低いといえる。「なら」は総数が少なく、フォーマル、インフォーマル場面の出現数もほぼ同率であることから、中立的といえる。フォーマル、インフォーマルにおける出現総数から、「ば」が改まり度が高く、「たら」が改まり度が低い、「と」「なら」は改まり度が中立的であるといえる。この限りでは「ば」が書きことば的、「たら」が話しことば的、「と」が中立的であるというこれまでの指摘と矛盾しない。しかしながら、条件接続用法と非条件接続用法とに分けて見ると、4形式が必ずしもこのような結果になるとは限らない。ここでは主として非条件接続用法の4形式について検証する。

非条件接続用法の「と」はフォーマル場面のほうが出現数が多くなっている。その中でも評価的・接続詞的用法の「と」のフォーマル場面における出現数の多さが際立つ。例えば評価的用法では次の例49の「打合せ」の電話における「頂けるとありがたいのですけど」、例50の「会議」における「ていただくと、いいんではないか」のようにフォーマル場面では丁寧な表現で使われている。接続詞的用法では「そうすると」がフォーマル場面のとくに「会議」において多用されている。次の「会議」の例51のように「そうすると」は順接型の接続的用法として前の文と後の文とを論理的な関係において結合する働きを持つからであろう。

49 略 電話を頂けるとありがたいのですがあの、会社のほうにずーっと
今日はおりますので。 [06A・40f・打電]

50 略 ええー、その前半の部分の全体の、感想みたいなものをはじめに
述べていただくと、★いいんではないか。〈言いさし〉

[04D・60m・会]

51 今までいつも18日が初国取ってたので19日はやっぱり避けたほうがい

い、あの卒業式の前日なんで避けるとゆうことで、でー、そうすると卒業式のあとになってしまったんですけど、略 [07A・40f・会]

非条件接続用法の「ば」もフォーマル場面のほうに多く出現しているが、その中では接続詞的用法がフォーマル場面に多用されている。とくに「たとえば」は47件中34件がフォーマル場面に現われており、次の52の使い方のように例を挙げたり、あるいは言い換えて説明する同列型の接続表現として「会議」や「打合せ」に多用されている。

52 で、ここであのー、たとえばってゆうことで例をあげたんですが、そのー、期間、期間別、ですね。 [17A・30f・会]

このように「と」「ば」の非条件接続の使用がフォーマル場面に多いのに対して、「たら」の非条件接続用法はインフォーマル場面に多用されている。その中でも文末詞的用法や接続詞的用法の「たら」が最も多くインフォーマル場面に用いられている。インフォーマル場面に多用される「たら」の文末詞的、接続詞的用法の例だけ挙げておく。

53 もしあれだったら [名前] さんに少し持ってったら↑ これ。 [19A・40f・雑]

54 ふつうね。 [17K・30f・雑]
それだったら、ぜんぜん (うんー inf (女)) 問題ないしさー [17K・30f・雑]

「なら」は資料中に出現する数が少なく、表3に見る限りにおいては非条件接続用法・条件接続用法ともにフォーマル・インフォーマル場面の出現数に差がなく、中立的な条件接続形式であることが分かる。しかし細かく見ると、非条件接続のうち評価的・提題的用法の「なら」は数は少ないがインフォーマルな場面のほうに使用されている。例だけ挙げる。

55 だってねー、おかしいと思わない、0 (ゼロ) 才だって、しょ、0
オーも、書いていいことになってるでしょ。 [10A・40f・雑]
動物以外ならいいんだ。 [10B・40m・雑]

56 →###日本なら、全部食べたなら1万円とかっていう世界じゃないですか。〈笑い・複〉〈間4秒〉 [18C・20f・雑]

なお、条件接続用法においてはインフォーマル場面での出現数が最も多いのが「たら」であり、「と」も比較的インフォーマル場面のほうが多い。「ば」はフォーマル場面に使われる傾向が高い。

4 おわりに

自然談話に出現する「と」「ば」「たら」「なら」の実態を検証した結果、次のようなことがいえるかと思う。

「ば」が書きことば的、「たら」が話しことば的、「と」が中立的であるというこれまでの指摘は条件接続用法におけるものであること、非条件接続用法においてはむしろ「ば」が話しことばに多用され、「たら」や「と」は条件接続用法ほど多くは話しことばには使われていないこと、さらに非条件接続用法の中では文末詞的・評価的用法の使用が最も多いこと等が明らかになった。しかし、非条件接続用法の「ば」が話しことばに多用されているといってもそれは改まり度の高い場面の方に多いこと、それに対して非条件接続用法の「たら」は改まり度の低い場面の方に使われていること、「と」は非条件接続用法においてはむしろ改まり度の高い場面に使われる傾向があること、「なら」は改まり度の高低に関わりなく使われていること等が実証された。

今回の調査結果の報告は主として「と」「ば」「たら」「なら」の非条件接続用法についてであったが、条件接続用法についての観察は次回の課題にしたいと思う。

＝ 参考文献 ＝

- 国立国語研究所 1964 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』
- 現代日本語研究会 1994 『職場における女性の話しことば』財団法人東京女性財団1993年度助成研究報告書
- 阪倉篤義 1958 「条件表現の変遷」『文章と表現』角川文庫
- 高橋太郎 1983 「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 寺村秀夫 1981 「日本語の文法（下）」国立国語研究所
- 中島悦子 1987 「継起を表す「と」」『国文目白』27号 日本女子大学国語国文学会
- ” 1988 「継起の「と」と同時の「とき」」『国文目白』28号 日本女子大学国語国文学会
- ” 1990 「日本語と中国語の条件表現－「と」と“一”“就”を中心に－」『日本語教育』72号 日本語教育学会
- 松下大三郎 1928 『改選標準日本文法』勉誠社
- 益岡隆志・田窪行則 1989 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 前田直子 1991 b 「条件文分類の一考察」『日本語学科年報』13 東京外国語大学
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文堂
- 渡辺 実 1974 『国語構文論』塙書房